
八百比丘尼

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

八百比丘尼

【コード】

N9030A

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

東北を旅していた『私』。彼は衣川に来たところで一人の妙齡の尼僧と出会う。彼女の話すこととは。

第一章

八百比丘尼

あれはもう何年前になるだろうか。その時私は岩手の遠野にいた。ここは柳田邦夫が遠野物語を書いたことで知られている。雪が深く、冬はいつも厚い雪に覆われている。一つ美味しいものを出してくれる宿を知っていてそこに止まった。そしてその美味しいものと花巻の温泉が目当てでここまで来たのである。花巻はいい温泉があり、個人的にお気に入り場所だったのだ。今まで何度も通っている。その厚い雪を踏みしめながら温泉巡りをしていた。寒い街なので温泉が実に有り難い。私は酒と温泉を楽しみながらこの街に滞在していた。

雪が止んでいた日のことであつた。私は道標に衣川とあつたのを見つけた。

「衣川というと」

私はそれを見てふと思ひ出した。源義経が死んだあの場所である。今まで何度も小説やドラマになっており義経と弁慶が死ぬ場面も何度も見てきた。

だが実際の衣川を見たことはなかった。それを見て私は興味を抱いた。是非実際に見てみたいと。

すぐに辺りを見回しタクシーを探した。運のいいことにそれはすぐによつて来た。私はそれを見つけて手を挙げた。

「どちらまでですか？」

運転手は恰幅のいい初老の男性であつた。私がタクシーの後部座席に乗るとすぐに声をかけてきた。

「衣川までお願いします」

私はコートを脱ぎながらこう言った。

「衣川ですか」

「はい。この大湊に来て目に入りまして」

「成程」

「行ってみようと思いましてね」

「そういうお客さんが多いんですよ」

運転手さんは私の話を聞いてこう笑った。後部座席からだ横顔が少ししか見えないがそれでも笑っているのはわかった。見れば屈託のないいい笑顔であった。

「そうなんですか」

「人気がありますからね、義経公は」

「はい」

「何度もドラマになってますし。私も見ましたよ」

「僕もですよ」

私もそれに応じて返した。

「やっぱりね。けれどここから衣川まで距離はありますよ」

「そんなにありますか？けれど同じ県内ですよね」

「同じ県にあってもですよ」

運転手さんは答えてくれた。

「岩手ってのは広くて」

「はあ」

今気付いたがこの運転手さんには東北訛りは少なかった。話している言葉は標準語に近い。だがやはりアクセントは独特のものがあったが。

「この花巻からは離れてますよ？それでもいいんですか？」

「そうですね」

私はそれを聞いてまずは腕時計を見た。まだ朝になって少ししか経ってはいない。日帰りで行くこともできるのでは、と思った。

「時間がかかりますか？」

「普通に行けば」

運転手さんは言った。

「普通に、ですか」

「近道を知ってますよ。そこを飛ばせばすぐです」

笑みが変わっていた。ニヤリと面白そうに笑っていた。

「それで行きますか？」

「はい」

私もそれでいいと思った。ここはそれに乗ることにした。

「わかりました。それじゃあ行きますよ」

運転手さんはそのニヤリとした笑みのままアクセルを踏んだ。そして派手に飛ばしはじめた。

「後ろにシートベルトがありますからね」

「ええ」

見れば腰のすぐ側にあった。

「それ着けておいて下さい。とにかく飛ばしますんで」

「わかりました」

私は言われるがままシートベルトを着けた。そして車中の人になった。

タクシーは山道を進んでいた。やたらと曲がった山道を進んでいく。山の木々も道も雪で真っ白だったが車はそんな雪をもともせず進んでいた。そしてどんどん先に進んでいた。

「こんな雪の中よく飛ばせますね」

「地元ですからね」

運転手さんはその訛りのある標準語で応えてくれた。

「慣れてますから」

「慣れですか」

「お客さんは何処の人ですか？」

「大阪です」

私は素直に答えた。

「大阪の住吉の方です」

「ああ、神社のある」

「ええ」

住吉大社のことである。住吉のことを出すといつもこう言われる。

「あそこには一度だけ行ったことがありますけれどね」

「そうなんですか」

「はい。うちの女房と一緒にね」

運転手さんは前を向いたままこう応えた。車の運転は相変わらず派手なものであった。

「行ったことがあるんですよ」

「大きいでしょう」

「そうですね、あんな大きい神社はあまりないですね」

「それに橋に驚いたでしょう」

「ああ、あの凄い橋ですね」

「そう、太鼓橋です」

私は言った。

「あれはあの神社の名物でして」

「らしいですね」

「あそこの橋は何度も登りましたよ」

「地元の特権ってやつですね」

「まあそういうやつですね」

私は笑いながら言った。

「ここで温泉にいつも入られるのと一緒に」

「ははは、後は美味しいお酒と」

「日本酒がね、本当に美味しいですよ」

「岩手は酒の本場ですから」

運転手さんは上機嫌になってきていた。どうやらかなりの酒好きであるらしい。

「美味しい酒が幾らでもありますよ」

「それと食べ物も」

「食べ物は大阪もいいですよ」

「ふふふ」

それを言われると思わず笑ってしまった。

「まあ確かに」

大阪では何と云ってもまずは食べ物である。それを誉められて悪

い気はしなかった。

「大阪は特に五月蠅いんですよ」

「らしいですね」

「まずければそれで潰れますから」

それが大阪だった。あとマナーの悪い店もそうだ。噂話に尾緒がついてとんでもない話になって客が寄り付かなくなる。そして潰れるのだ。

「シビアですね、また」

「普通そうじゃないんですか？」

「まあ大体ここも同じですけれどね」

「何処もそうでしょうね」

「けれど大阪程ではないですよ」

運転手さんは苦笑いを浮かべていた。

「あんなにシビアではないです」

「そうですね」

「そうですね。まあ美味しい料理が多いのは何よりです」

「はい」

「大阪はうどんが特にいいですよね」

「よくそう言われますね」

東京は蕎麦、大阪はうどんと。私個人としては蕎麦も大阪のそれの方がいいと思う。東京の蕎麦を見て本当に驚いた。つゆが真っ黒なのだ。墨汁を入れているのかと思った。話には聞いていたがそれが本当だとは流石に思いはしなかった。あれは本当だったのだとその時はじめて知った。

「ここは蕎麦ですよ」

「わんこ蕎麦ですか」

私はこれを出してニヤリと笑った。

「もう召し上がられましたか」

「勿論です」

食べない筈がない。

「食べる前にわざと歩き回って腹を空かせてから」

「それはまたえらく気合の入ったことで」

「百杯いけましたよ」

「お見事」

運転手さんも素直に賞賛の言葉を述べてくれた。

「そこまでいければ凄いですよ」

岩手といえばわんこ蕎麦である。盛岡名物だがここではわりかし普通に食べられているようである。もつとも最近ではわざわざ大阪まで来てくれてやってくれているが。これは好きだ。大抵三桁にいくまで食べている。行く前に走ったり歩き回ったりして腹を空かせておくのは基本だ。

「ただ、すぐにお腹が空きますよね」

「いや、それは不是吗」

だがこれには賛同してはくれなかった。

「それだけ食べれば満足じゃないんですか？」

「いや、お蕎麦って消化にいいですから」

私はこう反論した。

「すぐにお腹がすいちゃって」

「そしてまた食べると」

「はい。そして飲む」

「何かこっちの食べ物も堪能してくれてるみたいですね」

「お菓子ももらってますよ」

「お酒を飲まれるの？」

「僕の場合はそれでもいけるんですよ」

実は甘いものも酒も両方いけるくちだ。甘い赤ワインを飲みながらケーキやチョコレートをつまむこともある。これは中々あつと自分では思っている。

「そうなんですか」

「流石に饅頭と日本酒は無理ですけどね」

「ははは、聞いただけで胸焼けしそうです」

八百比丘尼

そんな食べ物の話しながら車中を過ごした。そしてすぐにその衣川に着いた。

第二章

「ここです」

「意外と開けてますね」

「松尾芭蕉の頃とはまた違いますよ」

私は車の中から外を見て言った。運転手さんはそれを聞いてこつ返してきたのだ。

「あれでしょ？あの俳句から想像されていた」

「ええ」

あの句からは何かえらく何もないところだと思っていたのだ。だが家も店も思つたより多い。宿もある。

「ここは観光地ですからね」

運転手さんは言った。

「それなりに人も多いんですよ」

「義経公のおかげですね」

「そうですね、あの人がここにいてくれたおかげで今こつやっけて多くの人が食べていつてるんです」

「いい人ですね」

「また面白いことを仰いますね」

運転手さんはそれを聞いてまた笑つた。

「私もこつして仕事をもらえましたし」

「はい、料金ですね」

「そついうことです」

運転手さんにお金を払つた。それからタクシーを出る。

「それじゃまた縁がありましたら」

「はい。お蕎麦でも一緒に」

最後まで食べ物話をして終えた。そして私は衣川に出たのであった。

やはりイメージと違つていた。もっと草ばかりの土地だと思つて

いたのであるが実際は結構家も人も多い。あちこちに義経主従のことが書かれている。思っていたのと少し違っていて興醒めはしていた。

だが同時にこんなものかな、とも思っていたりもした。結局人が行きたいと思うような場所に人は集まる。そしてそこに街や人盛りが出来るのだ。だとすればここがこうした感じになるのもむべなるかな、と思った。

そんなことを考えながら歩いていた。あちこち見たがやはりイメージと違うのは事実だった。私はそれを少し残念に思いながら同時にそのイメージ通りのものを探していた。何処かにはあるだろうと思ひ、そしてなくてもそれはそれで仕方がないだろうと達観したふうに考えたりもしていた。

歩いているとふと茶店に出会った。そこで一人の尼さんが店の前の席で座ってお茶とお菓子を楽しんでいるのが見えた。

「尼さんか」

ここでふとそのイメージが重なった。昔の感じをである。

見れば若い尼さんであった。顔立ちは整っている。そして気品もある。その様子に何かあったのかと思うと同時にそれが実にかつては何かあると出家した昔の時代のことを思いそこに松尾芭蕉の頃のこの衣川のイメージを重ね合わせた。すると妙にこの尼さんに愛着が湧いた。それに思うところがありこの店に入った。

「側の席を宜しいでしょうか」

私は尼さんに声をかけた。

「えっ」

いきなり声をかけられ驚いた顔になった。それを見て少し済まないと思った。

「ええ、はい」

だがすぐに我に振り返り言葉を返してくれた。

「どうぞ」

「有り難うございます」

私はそれを受け側の席に座った。そして注文の後でこの尼さんに声をかけたのであった。

「実は観光で来たのですが」

「そうみたいです」

尼さんは私の言葉を聞いて応えた。

「わかりますか？」

「ええ、言葉で」

私はそれを聞いて成程、と思った。標準語を話しているつもりでも訛りは出るものである。さっきの運転手さんがそうであったように。

「関西の方ですよ」

「はい」

私は素直に頷いた。

「その通りですけれど」

「やっぱり。けれど関西も言葉が少し変わりましたね」

「そうですね」

ここで頼んでいたお茶とお菓子がやって来た。抹茶と蕎麦菓子である。

「昔は。もつと訛りが強かったんですよ」

「そうだったんですか」

言われても今一つピンとこない。言われてみればそうかも知れないが違うかも知れないとも思った。

「特に京都は」

「はあ」

余計にわからない。京都にはあまり行かない。だからそう言われてもやはりわからないのだ。

「今の方はかなり訛りが弱くなっていますね」

「いやあ、そうでもないと思いますよ」

私はお菓子を食べながらそれに応えた。

「よく関西人は訛りが強いって言われますよ」

これは本当のことだ。広島に九州、それにこの東北も。訛りと言えはこうした地域であろうか。

「それを隠すつもりもありませんしね」

「昔の薩摩の言葉は凄かったですね」

「薩摩？」

「鹿児島のことです」

「尼さんはこう説明してくれた。」

「昔はこう呼んでいたのよ」

「ああ、昔の」

私はそれを聞いて不思議に思った。そう呼ばれていたのは事実だがそれは本当に大昔である。少なくとも今生きている人間が使う言葉ではなかった。

「ついつい使ってしまったよ」

「そうだったのですか」

頷きはしたが納得出来るものではなかった。違和感を禁じえなかった。

「本当に凄かったんですよ」

「らしいですね」

それは少しだが聞いたことがある。

「何を話しているのか。わからない位で」

実際にあえてそうしたらしい。他の国の者が聞いてもわからないようにそんな難解な言葉を作ったらしい。薩摩らしいと言えばらしいか。

「東北も言われますけれどね」

「特に津軽ですよね」

「はい、あそこは特に」

尼さんはここで遠い目をした。

「あの人も東京で苦労されていましたし」

「あの人？」

「御存知ですか？作家の」

「作家の」

それを聞いてまさかと思った。

「太宰治ですか？」

「わかりましたか」

「津軽出身の作家といえばあの人ですから」

すぐにわかった。実家は今でも津軽で政治家をしている。かなりの名家の出身として有名である。かつては厄介者だった太宰も今では家の誇りだという。変われば変わるものである。

「顔立ちがよくて。繊細な人でした」

「らしいですね」

太宰の顔も人となりも写真や話でよく残っている。太宰は美男子でもあった。そして確かに繊細な人物であった。

だが。やはりここでも私は疑問に感じるがあった。

「あの」

「何でしょうか」

「どうしてそんなことを御存知なんですか？」

私は尋ねた。

「昔の薩摩弁や太宰治のことを。それも直接見聞きされたような話し振りですが」

「実際に見聞きしましたので」

「えっ!？」

私はそれを聞いて思わず顔を顰めさせた。

「今何と」

「実際に見聞きしましたと」

彼女は答えた。

「まさか」

「いえ、本当です」

彼女は穏やかな笑みを浮かべてこう言った。

「津島さんですね」

「はい」

太宰治の本当の姓だ。太宰治というのはペンネームであり、本名は津島修治といった。

「本当にいい方でしたよ。明るくて」

「らしいですね」

それは聞いたことがあった。自殺癖があり、薬に溺れていた時もあったが太宰は基本的に明るい人間だったらしい。躁鬱だったのだろうかとも思うのだが。

第三章

「江戸……いえ東京で何度か御会いしました。お話もしましたね」

「そうなのですか」

「お酒が好きな方でしたね」

「苦しみながら飲んでいたそうですね」

「はい。そして」

「自殺したと」

「残念なことでした。胸を患っておられていましたが」

よく知っているなど思った。太宰は結核持ちであり吐血もしていたのだ。

「あれは今は助かる病気でしたね」

「はい」

「昔はあれで。よく亡くなられたのです」

しかしそれは本当に昔の話だ。今の話ではない。少なくとも彼女の生きている時代のことではない筈だ。その顔を見る限り二十代後半、どう見ても三十台前半に見える。しかし今の彼女の話はどう聞いても不自然だ。如何にも太宰をその目で見てきた言葉だからだ。

「本当にね」

「同じ時代の作家の織田作之助もでしたね」

ここで私は地元の作家を出してきた。

「織田作さんですね」

「はい」

この作家も知っているようである。

「あの人も御会いしたことがあります」

「東京ですか？」

「はい」

だとすれば昭和二十一年の終わり頃か。彼は取材に大阪から出て、

そこで客死するのだ。

「一度だけでしたけれど」

「そうだったのですか」

「あの時の都は。もう廃墟でした」

「その前にも廃墟になりましたね」

「はい、何度か」

ここで私はかまをかけたのだ。関東大震災を出してくるだろうと思っていた。演技ならばそう答えてくると思っていた。しかし彼女は何度も、と言った。

「あそこは。本当に地震が多くて」

「関東はね」

私はそれに答えた。

「関西から見れば異様に地震が多いですよ」

「はい。何度も何度も街が壊れました」

私を知っているのは関東大震災だけだ。だが違うらしい。

「富士の山も噴火したことがありますし」

「富士の！？」

それを聞いて顔を顰めさせた。あの山は長い間噴火していない。

それこそ二百年、いやもつと経つ。それこそ大昔の話の筈だ。

「あの時も。お城が崩れて」

「お城！？」

「北条様がおられたお城です」

それを聞いてわかった。小田原城だ。そういえばあの時の地震や噴火で小田原城は崩れている。

「あれだけ立派なお城が」

小田原城はとにかく大きかった。街まで取り囲んだ城であったのだ。日本に一つしかない城塞都市であった。

「崩れてしまいました」

それを聞いてこの尼さんがどうやら普通の者ではないと確信した。

「小田原におられたことがあるのですね」

「そうなのです」

そしてまた応えてきた。

「いい街でした」

「そうらしいですね。行ったことはないのですが」

私は言った。

「一度行かれるといいですよ」

「何分関西にいますのでね」

そう返して苦笑いを浮かべた。

「小田原までは」

「今回の帰りに行かれたらどうですか？」

「まあ考えてはみまず」

あまり考えずにこう返した。

「関東は好きではないのですけれどね」

「水がよくないと」

「はい」

「京や大阪の人はよくそう言われますね」

「食べ物の味も全然違いますしね」

「ここでお茶を一口含んだ。」

「お茶も全然違うんですよ」

「ですね」

これは尼さんもわかっていることであった。

「お茶はやっぱり京です」

「はい」

「けれど。あの街も随分と変わってしまいました」

ふと遠くを見ていた。

「一度焼けてしまっただけから。本当に」

「そうなのですか」

応仁の乱らしい。

「それまで残っていたものが。殆ど」

「凄い戦乱だったらしいですね」

「はい。都が焼け野原になって。多くの人が逃げていきました」
都落ちした公家も多かった。戦国が終わりになりようやく織田信長や豊臣秀吉により復興されたのである。これは歴史にある通りであった。

「あの時で。都を去りました」

「京におられたのですね」

「ええ。暫くの間」

「はい」

聞いていてそれはあくまで彼女の基準であり、実際にはかなり長い間の時間であろうと思った。だがそれは口に出しては言わなかった。

「それまでは。若狭にいたのですが」

「若狭に」

「はい。今は何といたしましたっけ」

「今は京都にあります」

今の基準で考えると同じ府にあるがその時は違っていたのだ。違う国であったのだ。それに今でも同じ京都府にあっても京都とあの辺り、そう舞鶴近辺は全く違う地域である。山を越えていかなければならず、その山がまた深いのだ。そして山を越えたその場所はいつも雨や雪が降る港町なのである。

「そこにおりました」

「そうだったのですか」

「あれは私が娘子の時でした」

彼女はまた語った。

「お父が。変わった魚の肉を私に食べさせて」

「魚の」

どんな魚か不思議に思った。確かにあの辺りは魚がいいことで知られている。私も北陸やあの辺りでは魚と酒を楽しんだものである。「それからです。私は一人残るようになったのは」

「残るとは」

「私の夫は。次々と死んで」

私はそれに関しては何も言わなかった。別れの辛さは本人にしかわかりはしないだろうと思ったからだ。

「いつも私だけが残ったのです」

「そうだったのですか」

「あの時も。私は見ました」

横目で彼女を見ると遠い目をしていた。

「北の方へ向かう山伏様達が」

「それは何時の頃のお話ですか？」

「鎌倉様、いえ入道様が亡くなられた後でしょうか」

鎌倉、といえば鎌倉幕府か。だが入道というと。若しかして平清盛のことかと思った。

「北の方に行かれていました」

「それは若しかして」

「はい」

彼女はまたしても頷いた。

「ここで。亡くなられた方でした」

「そうでしたか」

私はそれを聞いて目を伏せさせた。

「やはり」

「兄上様とのことで。悩んでおられました」

「らしいですね」

歴史のままだ。やはり彼はあの道を通っていたのだ。

「あの方に御会いしてから。私はその時の主人に先立たれ。尼になることを決めたのです」

「それは何故」

「私だけが生きているからです」

彼女も目を伏せていた。

「ただ私だけが生きていても。何もありませんから」

「左様ですか」

「そして私は。都に入りました」

「応仁までそこにおられたのですね」

「寺にいましたが。それも」

「戦で逃げられたと」

「そうですね。そして小田原にもいましたし江戸にもおりました」

「江戸にいたのは長かったのですね」

「江戸はいい街でした」

言葉がしみじみとしたものになっていた。

「賑やかで。それでいて綺麗で」

「はい」

「けれど。やはりそこにも無常はありました」

「そうですね」

これは何処にでもあるのであろうか。私は話を聞きながら思った。

「花魁さん達が」

「彼女達ですか」

それを聞いてわかった。華の街吉原も一歩歩けば闇が広がっていた。瘡と酒、そして鉛の毒で花魁達の命は短いものだった。昔は白粉に鉛を使っていたのだ。死ぬ者は多かった。

「美しくあつても。すぐに旅立たれて」

「彼岸までですね」

「ええ。私はそういう方々も見てきました」

「あの時はよくあつた話ですね」

「そうですね。時代が変わっても」

明治になって東京になっても吉原はあつたしそういう街もまった。こうした話は何時の時代にもあるものだ。

第四章

「花魁の方々だけでなく」

「明治になつても色々ありましたしね」

「東京になりましたが。まずは」

「薩摩の人ですか」

「はい」

彼女はまたしても頷いた。

「大層立派な御方でしたが。亡くなられました」

「どんな方でした？」

「二人おられました。大柄で恰幅のよい方と。痩せていて鋭い目をした方です」

それを聞いておおよそのことがわかった。薩摩で幕末、そして維新に活躍したあの二人だ。袂を分かつことになったが幼い頃からの親友同士であり、そして盟友であった。彼等なくして維新はなかっただろう。

「皆さんは大柄な方ばかりを慕っていましたが。私はあの鋭い目をされた方もお慕い申しておりました」

「二人共私がなかつたそうですね」

「はい。本当に一途な方々でした」

私はなかつたので有名な二人であった。蓄財も一切なく、そして全てを公に捧げた。口で言うのは容易いがやはり簡単に出来るものではないだろう。あくまで彼等の武士道により価値観に基づくものであるうしそれを過剰に賛美するつもりはないにしろそれでも己の価値観を守り通したのは賞賛に値すると思う。

「それでも」

「残念なことですね」

だがそれがいいのか悪いのかというところはまた別の問題になるかも知れない。あの二人はあまりにも個性が強かった。あれ以上歴

史の舞台には変な影響があったかも知れない。若しかするとで
しかないが歴史的にはいいタイミングでの退場であったのだろうか。
そう思う時がある。

「あの方々に御会い出来たのは幸せでした」

「それはいいことです」

「それから。東京にありました」

「江戸の頃と比べてどうでしたか？」

「華やかなものでした」

声は笑いだしているのがわかった。

「何もかもが瞬く間に変わって。まるで万華鏡みたいに」

「ザンギリ頭を叩いてみれば」

ここで私は口ずさんだ。

「文明開化の音がする、ですか」

「それから。変わり続けましたし」

「綺麗だったのですね。あの頃の東京は」

「今は全然違うのでしょうね」

「まあ少し観ただけですけどね」

私はやはり関西の方がいいのであるが。

「今は今で魅力のある街になっていますよ」

「そうですね」

「けれど行かれないのですね」

「はい、もう」

彼女の声から笑みが消えた。また俯いた声になった。

「焼け野原になって。そしてあの方も死んで」

「太宰さんですか」

「時々あの訛りの強い言葉で言っておられたのですよ。また故郷に
帰りたいと」

「ほう」

それは初耳であった。太宰は戦災を避けて帰郷していた時期があ
る。戻ってすぐの頃だったし、それに故郷の実家とは複雑な事情が

あつたのに。自作でもよくその複雑な事情や心境を語っている。それでその様なことを言っていたのは意外であつた。

「最後の頃は。そう仰っていました」

死ぬ前にそう思っていたということであろうか。

「それで。あの方が亡くなられた後津軽に行き。東京に戻ろうと思つたのですけれど」

「ここで立ち止まってしまったと」

「まさかここが。あの山伏だつた方々が最期を遂げられた場所だつたとは、と思ひまして」

「またしても無常に遭つたということか。」

「懐かしくもあり悲しくもあり。ここに足を止めてしまいました」

「それからここにおられるのですね」

「はい。もう暫く」

寂しい声で答えてくれた。

「私も。もうすぐ去りますから」

「もうすぐとは」

「永遠というものは結局ないのです」

「声が更に寂しくなる。」

「気の遠くなるような長い時間を生きていても。それが終わる時が来るものです」

「その魚の肉を食べてもですな」

「あの魚を食べたのは。きっと運命だつたのでしょ」

「運命、ですか」

「はい。私に寂しさや無常を教えてくれる為に。神が食べさせて下さつたのです」

「よかつたと思われませんか？」

「よかつたのでしょ」

自分でその結論は下せないようであつた。

「ただ。あまりにも時間が長過ぎました」

「長い時間は不要ですか」

「人間には相応しい時間があるものです。そしてそれが終われば輪廻に身を任せる」

「その輪廻に加われなければ悲しみが待っているだけ」

「多くの別れと悲しみを見てきましたから。こうしたことが言えるのでしょうか」

「人間生きていれば絶対に別れと悲しみがありますからね」

私は言った。言いながらまたお菓子とお茶を口にする。確かに美味いがどうもこうした場面では酒を飲みながら話をしたいと思った。御仏に仕える人の前でこう思うのは不謹慎だが。

「その悲しみを何度も何度も味わうのは地獄であります」

「長く生き過ぎるのは地獄ですか」

「人の背負える限度を越えると。何もかも地獄になります」

「悲しみの地獄」

私はポツリと呟いた。

「私にはわからないでしょうね。申し訳ないですが」

「いえ、聞いて下さったことに感謝しています」

優しい声で答えてくれた。

「私の。とりとめのない話を」

「いえ。お聞かせ頂いてこちらでも感謝しています」

この時私達は互いを見てはいなかった。茶と菓子を嗜みながら前を見ていた。目は少し下にあった。

「寂しいお話ですね」

「寂しい、ですか」

「はい。これからどうされるのですか？」

「最後の時間も一人で過ごすつもりです」

彼女は言った。

「私は。他に誰もいませんから」

同じ時代の人間は当然残ってはいない。そして知っている者達も全て先に旅立った。だから一人しかいないのであった。本当に寂しいことである。

「その方がいいでしょう」

「けれどすぐに一人ではなくなりませよ」

私は言った。

「えっ!？」

「貴女は確かに多くの別れを経験されてきました」

私は言葉を続けた。あえて彼女は見なかった。

「ですが。その方々は皆貴女をお待ちしておりますよ」

「私を」

「そうです。人は死んでも。それが別れではないのですよ」

「別の世界で会えるのですか」

「これはある人に言われたことですが」

私はまた言った。

「別れは確かにありますけれどね。絶対の別れはないのだと」

「はじめて聞きましたが」

「気付かれなかっただけです」

「長い間。生きていて、ですが」

「一つのことにと捉われていると。他のものまで目がいかないのです」

「よ」

「.....」

黙ってしまった。機嫌を損ねてしまったのだろうかと思った。だがそれは違っていた。

「では。御会いできるのですね」

「そうです。次の世界で」

私は言う。

「皆さんお待ちしていますよ」

「では憂いは必要ありませんね」

「勿論です」

励ますつもりではなかったがこの言葉が出た。

「安心して旅立たれるといいですよ」

「それを聞いて救われました」

声が微笑んでいるのがわかった。

「それでは」

すっと立ち上がった。小銭を置いていく。

「また、御会いしましょう」

「はい、また」

それが別れの挨拶であった。彼女はそのまま何処へかと去って行った。後には何も残しはしなかった。

衣川での話であった。今ではもう遠い昔の話に思える。あの人は今どうしているだろうか。旅立たれたかも知れない。しかし私はそれを確かめる術を知らない。若しかすると知ることになるかも知れない。

だがそれは今ではない。しかしいずれやって来る。その時を楽しみにしておくだけであった。

八百比丘尼

完

2006・4・18

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9030a/>

八百比丘尼

2008年11月7日09時20分発行